



NO. 5  
 34. 10. 15 発行  
 兵庫県兵庫郡山崎町  
 教育委員会内  
 兵庫郷土研究会  
 TEL. 23

# 赤穂郡内に於ける 旧安志領の現況

小林 楓 村

昭和七年十一月初めに山崎高等女学校に於て兵庫郡郷土史料展覧会が開催された時、私は模造紙一枚に赤穂郡の略図をかき、それに安志領の村名と石高を記載して出品した事があった。今回はその部落の紹介をしましう。

赤穂郡は、元禄変後、赤穂領、尼ヶ崎領、安志領、天領に分れていた。明治廿二年市町村施行で壱町十五ヶ村に分れ、昭和廿九年八月からは赤穂市、相生市、上郡町と分れ／＼になった。

安志領は元禄変後、一時天領であったが享保元年から安志藩小笠原侯の領分になった。赤穂郡内の旧安志領の村名とその石高は

- 三瀬山 (三七、一六七)
- 能下 (七〇、六九八)
- 横尾 (四三〇、七三九)
- 小野豆 (七七、七八六)
- 菅谷 (二〇五、一三一)
- 下頃 (三五、七八〇)
- 益島 (三三三、三八六)
- 雷満 (五一、五六八)

- 黒石 (六二、五三三)
- 倉尾 (一八七、五四六)
- 相野 (五二、二〇〇)
- 楠木 (九四、七二五)
- 抜位 (八七、九三九)
- 小皆坂 (一〇、八七六三)
- 銀岩 (二二、五九一〇)
- 大枝新田 (二三、八〇五)
- 国見 (六八、六九八)
- 市原 (一一、四四四)

メ十八ヶ部落で、石高二四五四石七七八。三瀬山(相生市矢野町)は、西播秀峰経納山の山上にある。山下から世余町登ると箕覆山末福寺という真言宗現在本堂の観音堂がある。文福茶釜一ヶを保存して、子リン／＼の神秘の音響を訪ねる騒客が多い。部落名もその寺の山号から起つてゐる。戸数八戸の小部落で百姓の傍ら木炭の製造が多い。大塚の史蹟もあり、秦川勝の五輪石塔、源義家の宝篋印塔の鎌倉時代造の供養塔が現存してゐる。

菅谷(相生市矢野町) 矢野町の中央にあり小学校がある。寺もあり宮もある。戸数廿四、皆農家である。能下(相生市矢野町) 昔の三日月街道に沿う一段高い盆地にあり、三本平塔婆といふ峻しい坂を越せば、揖保郡新宮町の二柏野に出で、三日月町へ三里の所。百姓で傍ら薪炭を出す。戸数三十。

下頃(相生市矢野町下田の二小字) 明治十一年迄は一部落であったが下田と合併して今は一小字になつてゐる。戸数十余、殆んどが百姓である。此村に大牧甚六と云う大産屋があつた。安志の殿さんの家来がよくお金をかりに来て、田を耕す甚六について想つたとい

う話が残っている。その大牧家も明治初年に没落した。横尾（赤穂市有年横尾）千種川に沿う山陽線有年駅前の町がかつた賑やかな部落。安志領の年貢米は千種川の高瀬舟でここの富豪三上家の倉庫に納った。即ち横尾蔵元である。横尾蔵元という札が発行されていた。当時淋しい村も今は鉄道開通のために一筋のにぎやかな町になっている。

釜島（赤穂郡上郡町）山陽線有年駅と上郡駅の間にある。線路に沿う凡そ三十の戸数のある部落。百姓どころ。

小野豆（赤穂郡上郡町）山腹にある小部落。平家の落人という伝説がある。三位山笠正寺に平家一族を祭った寺がある。「小野豆ゴンボひげゴンボ」という民謡まであるゴンボの名産地である。

富荷（赤穂郡上郡町）元鞍居村の富荷、真言宗富荷寺が部落になった。万勝院という閑静な浄地、林間学校には詠向の寺である。平地から廿余町上る山上の部落。小百姓に薪炭の生産地である。

黒岩（赤穂郡上郡町朝日の小字）元は赤松村、峻坂を登る廿余町の山上で廿余戸ある。小百姓で山に倚く。黒石材が出るから部落名がある。

小皆坂（赤穂郡上郡町朝日の小字）元赤松村で山腹にある十余戸の淋しい部落。山と田に倚く。

倉尾（赤穂郡上郡町岩木の小字）平地から登る十余町の細い谷向の部落。百姓で山に倚くところ。明治の英雄大島圭介はここに生れた。生家は現存している。銀岩（赤穂郡上郡町岩木）元赤松村の銀岩である。倉尾の隣り村、十余戸の小部落、山に田に倚く。昔赤松氏時代刀銀岩のあったところから名がつくという。赤松氏時代の墓碑が二基残っている。

拍野（赤穂郡上郡町）佐用郡に通ずる県道に沿う部落。十余戸の小部落。栗島神社がある。毎年一月三日の例祭には驚く程善男善女の参詣がある。

大枝新田（赤穂郡上郡町）千種川に沿う平地の十余戸ある部落。上郡町には近い。

楠木、国見（明治九年に楠木と国見と合併して楠木となる）楠木は山腹にあり、国見は山麓にある。小部落。田に山に倚く。佐用街道に沿う。

抜位（赤穂郡上郡町大酒の小字）大酒から西方の高山や頂にある。険しい山路を上る二十余町、明治時代までは三十戸もあつたといひ、大正時代には七戸、現在三戸の淋しいところだ。日用品は佐用郡久崎町に求め、電灯は佐用郡大釜から来る。凡ての交際は久崎町で、小中学生も久崎へ通っている。赤穂郡上郡町とは名のみで凡て交文渉といつてよい。

市原（赤穂郡上郡町朝日の一字）元赤松村、倉尾

から峻坂登る十八町、山腹にある十余戸の一小部落であるが、元代議士大上司は此の地の産である。(3475)

# 続岸田屋の幕末記録

安井寅一

## 美王事件後山崎に新関所建立

去る嘉永六五年異国船渡来交易御免に付、追々諸色高直に相成り去る萬延元年申年三月三日水戸様の浪士十七人江戸桜田御門前にて、当時御大老井伊掃部頭様を討取、其後此上何となく騒々敷、文久二年戊辰八月、勅命によつて美国人打拂の先陣と申囀え京都中山侍様を總大将にて、備前国藤本津之助、三河国松本健三郎始め并に諸国の浪人相集り、大和国十津川郷に蘆葦り、毎々合戦有之又候同年十一月生野銀山表に、京都堂上又主水正様と名乗り、長州其外諸国の浪士相集り生野御陣屋乱暴致候に付當国姫路但馬出石等より御出張にて、早速浪人退散、右浪人の内十人斗り刃様を守護致し、当地を通り長州へ逃下り候処、右の内美玉三平、中嶋太郎兵衛、黒田与八郎三人を木の谷にて三方谷百姓相集り鉄砲にて討取り、其余は悉く逃散申候、其後同子年長州家老三人上京いたし京都にて合戦有之右様にて世上騒敷相成候に付、御公儀様より諸国御領

主様へ夫々御固め為仰付候。当地は但馬因幡の要路に相当り候に付新関所を建、別て嚴重に御固め被仰出候然る処当慶応元年丑六月朔日何心なく川崎氏へ参り候処、保太天殿御咄に世上物惣に付是迄在末の木戸殊の外大破に付此度新関所御取立に相成候由被申候に付右新関建立の儀我等御引受申度由申候処、其後六月十日川崎氏より呼に参り保太天殿被申候に付此度新関御取立に付御普請引受申度段、殊の外奇特に候為思召則望通り、御普請引受早速成就に相成候様可致旨被仰渡、同月隣家松本吉太郎殿へ此由相囀候処、同人も同志に

地と服 服と地

# 三階高野

本町

電二九

て御世話致度旨に付則西人万幸引受御世話に取懸り申候、新関所は清水口、河野口、門前口、右三ヶ所は新関に建て其余上川、伊次口、寺町口、上ノ町口、右四ヶ所は在末の木戸を繕い普請也、併し西人の力及びびたたく依て友次次兵衛殿、前野五右エ門殿、山下忠左エ門殿、志波善重郎殿、壺阪柳吉殿、辰巳屋次兵衛殿、

塩物屋次郎右エ門殿、福田屋次右エ門殿、福田屋次右エ門殿、右八人へ示談に及び都合拾人にて出金いたし成就に相成申候、尤材木は御上様より被下置候。

## 河東の伝説 (三)

栗山宗知

兵栗郡山崎町岸田字当田三五六番の田地三反一畝歩は、昔から南光坊の田と呼ばれている。この田圃の一隅に五輪様のある墓地が四坪ほどある。墓は四基で、そのうち完全な五輪塔一つとあとは丸い石を積み重ねた墓である。室町末期の戦国時代の末頃に建てられたのであらうか、船越山南光坊のお姫さんの墓であると伝えられている。五十年ばかり前までは悪病平癒の仏様として近郷の者が参拜し香炷が絶えなかつたというが、今はビワの古木二本に守られて閑静に鎮座されている。

この南光坊田の所有者である浜田兵治氏は、毎月十五日に命日としてお姫様を祀つていられる。同家は先祖が船越手から㊦ニツ引定紋と名字、刀一本さすことを許されていて、お飯米料として三反一畝の田地を貰つたといふことで、金、正月には船越へ必ず行かれるぞうだ。同家には明治三十七、八年頃まで位牌と書き物

(漢文で肉筆書き部厚き物)が伝わっていたぞうだが位牌は四つ共川へ流し、書き物は古物商に売らつたといふことである。その後故藤田文本良氏が、この書物が三通あつて、一通は竜野にあり、一通は浜田家にある筈だといつて尋ねて来られたことがあつたぞうだ。墓地の言い伝えでは、地下三尺ほどのところが石畳となつていて、その下に三ツ重ねか五ツ重ねかの金の盃が埋められていたという。兵治氏の父が一度掘つてみてまた埋めたともいう。

## 史料「兵栗人名鑑」 (四)

(一) 柴田小膳 赤松 四 裕

小膳は山崎藩士で、その資性抜敏にして剛毅果断であつた。慶応三年向に山崎藩主本多忠隣は、大阪御城番として勤務していた。小膳は常に随従して探索方兼参政役であつた。そのころは明治維新前で、世論は尊王と佐幕の二派に分れ、天下はかなえの沸くが如くであつた。当時英國公使が兵庫南巷を迫つて上洛のことあり、物情騒然として諸藩は皆兵を出して警固した。たまたま山崎藩と紀州藩の警固線の境目より一浪士がおり出て、公使および随員を傷つけたので、両藩士は

責を負い罪をまつことになつた。時に小膳は、諸警固の大目付柳川藩立花家の臣、十時獲津の陣屋に往來し事情を陳弁し藩主忠隣をして事なきを得させた。ときの藩士等大いにその才に感服した。

また小膳は、早くより諸藩の名士と交り、天下の大勢を察して、幕府滅亡の近く到来するを思慮していた。このため幕命により、大阪御城番として京橋門を固めていた藩主忠隣に対し江戸詰の命があつたが、小膳は先輩の岩崎又左エ門、樽井九右エ門、松井連等と共に参政役を勤めていたが、倒幕大乱の機まきに迫れるを推察し、藩主の江戸詰を不利となし、幕府当路の権門に請願し奔走したので、遂に山崎藩帰国の允許を得たのであつた。はたして其後戊辰の役が起つたが、山崎藩は桑名、会津諸藩のごとく困難に際合せずにことなきをえた。これは実に小膳の先見と果断とによることなるが大であると言われる。而して其間に歿して豪放磊

### 高級紳士服

# 森木洋服店

山崎町役場横

電話五二六

茲、平然として酒をあふり同役の忠告をしばしは受けたという。これらの天りんをもちながら、尚充分に志をのぶるに至らず、明治二年八月朔日江戸よりの帰途桑名において病歿した。

## 明源寺

杉山よしあき

明源寺は、もと城下村金谷にあつて、長谷山遊鶴寺と称していたが、天正八年(一五八〇年)秀吉の兵火にあい、元和元年(一六一五年)ごろ、山崎町西新町に移転し、遊鶴山明源寺と改めたのである。

このことは、前号(会報3号)で述べたので、今回は歴代住伝について述べてみる。

(1) 門基梅林法師は、天台宗の僧であつたが、深く親鸞聖人の浄土真宗を信奉して、本願寺第十二世准如上人(一五七七一六三〇)に帰依し、播磨龜山本徳寺五世教円師(号準尊)を師として改宗したと伝えられる。これより己未本徳寺門徒明源寺と称したのである。

(2) 第二代、正林法師は、寛文十一年(一七二一年)辛亥十二月七日に、寺号公称と、本尊阿弥陀如来の木像を安置する許可を、本願寺第十四世寂如上人(一六五二一七二五年)より得ている。従つて、この時より、自他、

公私ともに正式に真宗本派に属したのである。また、上宮太子（聖徳太子）影像と真宗七祖影像及び、本願寺第十三世良如上人影像の奉安を願い出て下附されて、現在安置されているが、いづれにも裏に右のような裏書がある。

釈 寂 如（花押）

寛文十一辛亥年十月廿一日

本徳寺門徒播磨国実栗郡

拍野庄山崎村 明源寺什物

願主 釈 正 林

このころは、山崎藩は、松平備後守恒元へ池田光政の弟の三万石の城下で、恒元はよく仁政を施して、山崎藩政の黄金時代であつたから、時代の波に乗って寺院の形態を整えていつたのであろう。正林法師は、元禄元年戊辰（一六八八年）に入寂している。

(3) 第三代 貞存法師（元禄九年二月入寂）

(4) 第四代 琳貞法師（比岡醇徳著「実栗郡誌」に林貞とあるのは誤りであろう。元禄十年正月に入寂）

を経て、(5) 第五代 義海僧都が、宝永七年庚寅（一七三〇）二月に入寂したが、法嗣が無く無住となつた時、檀徒

中が願い出て、亨保四年己亥（一七五九年）に、現在の地、北真町の公地に移転したのである。そうして光泉寺玄哲法師の弟、正哲法師が来住し、第六代住転となつた。

(6) 第六代 正哲法師は、亨保十年己巳（一七五五）十月に入寂している。寿不詳。

その後、永い間、住職の無い期間が続いたが、ようやく

(7) 第七代を継いだのは、惠秀法師である。けれど

ども、その当時は、真宗の宗風振わず、本願寺第十六

世湛如上人は、それを慨し、忽然と厭世され、また第

十七世法如上人の項は、明和の法論、宗名紛議など、

内外多事であつた。その上本願寺の本堂が新築され

その野進の応募などで、惠秀法師も寺院経営に相当苦

勞したと推考される。現在の、本派本願寺の、本

堂である二十二間四面の阿弥陀堂は、この時、宝暦十

年（一七六〇）に竣功したのであるが、おそらく、惠秀法

師は門信徒と共に、普請の工事に上京して幾多の辛苦

をなめたことであらう。惠秀法師は、寛政元年己酉

（一七八九）に入寂している。寿不詳。(8) 第八代、慧甲

法師は、亨保二年壬戌（一八〇二）十一月に入寂し、(9) 第

九代、惠杖法師は、天保九年戊戌（一八三八）正月に七

十六才で入寂している。

(10) 第十代、惠実法師は、第九代惠杖法師の子で、幼

名童潭、書道は用節流、筆道は東山流の紅房免許、詩

は三管とも赤穂中村右三郎の門人、和歌道は山ノ里長

治祐義の門弟。室は松枝（赤穂郡益島村西光寺惠達法

師の娘、文政五年十一月に歿す。二十六才）である。

文化九年壬申（一八一三）十一月に、庫裡（八間半四間）を再建している。大工棟梁、京都西岡組藤原左兵衛、伴吉兵衛、同重吉、弟子甚蔵、作左エ門である。文政五年五月に、本願寺第十九世本如上人（一七七八—一八二六）より、親鸞聖人縁起（四幅の御影、御絵伝とも言う）を下附されている。寄進者は

- 一金二十両 三田 藤多平九郎殿
- 一銀五百兩 小林 牲川官左エ門殿
- 一同三百目 三田 九郎エ門殿
- 一同三百目 宮谷 治良七殿
- 一同五百目 比地町 善七殿
- 一同三百目 岡 折右エ門殿

である。（この御影は現在、今なお毎年十二月の親鸞聖人報恩講法要に開闢している）同年同月、惠実法師願主となり、本如上人より、蓮如上人の影像を受ける。文政七年（一八二六）七月に入寂す。寿三十二才。一男一

# 塚本金物商会

建築・金物・刃物

本町

電六八

女あり、(一)長女富野（池の内長専寺へ嫁す）(二)長男一法（後に第十二代を継ぐ）(三)第十一代、耕雲法師は、赤穂郡吉福村八木重水夫の子で、出家得度して、神崎郡護持村本誓寺の衆徒となる。

第十代惠実法師早逝のため、迎えられて入寺して第十一代をつぐ、室初枝（岸田明室寺の娘、明治四年九月に歿す）弘化二年乙巳（一八四五）八月、本堂及び山門を修理した。現在の本堂と山門に使用されている鬼瓦には、弘化二年八月、上寺村忠左エ門清原、政治郎造と銘のあるものがある。弘化二年十二月に入寂、行年六十二才。四男あり。(一)長男惠兼、幼名菊丸（赤穂郡高田在に留る）(二)次男諦忍、幼名久丸（魚崎延壽寺住職となる）(三)三男乙丸（宇佐崎妙覚寺住職となる）(四)四男童天、幼名安丸（加東郡粟生才覚寺住職となる）

## 平瀬清正の手亡塚

赤松 円琳

実乗郎千種村千草字上谷に往昔より手亡塚という名称で村人たちから馴染まれていた一つの墓がある。その墓は千草念佛として有名な浄土宗鎮西秋安国山教信院西蓮寺より約二丁程南にあたる処である。この墓は

平瀬六郎右エ門耐清正という武士の墓で墓碑牌名には

清眞院法譽浄久居士

谷名

平瀬六郎右エ門

慶長六年五月六月二日

宝珠院西譽妙意大師

谷名

同人妻

天正十六戊子年六月一日

としるされています。この平瀬清正の墓については昔から左の如き口碑が伝わっている。

天正八庚辰年（西暦一五八〇）五月、兵衛長水城主宇野下惣守政頼並に同民部大輔祐清父子が羽柴筑前守秀吉と戦いしも利あらず、無念の疾をのんで再挙を圖らんとし、作州小原城主新免伊賀守を頼り落行く途中、千種村千草宇大寺で自及し又一族郎党殉死したが政頼には未だ幼き男子があつた。その幼君を乳母が抱きて逃がれ行くのを知つた平瀬清正は、幼君を奪つて秀吉の見参に連れて、恩賞に預かるべしと思ひ、これを追撃したのである。

しかしながら幼君の乳母は女人の身といえども、戦国の乱世に城勤めする気丈夫な婦人であつたから、これを見るや大いに激怒し、幼君の一大事と勇をふるい、清正と及を交え、遂に清正の一臂を斬落したので、その傷手のために清正は、幼君を奪取る事かなわずこれ



を還したが、その時清正の及が幼君の眼に当り、一眼を不幸にして失明するに至らしめた。

乳母は自らの竹きによつて襲撃をまぬがれ、虎の尾をふむ心地して安全なる土地を求めんと、幼君をしつかと懐にいだきまいらせ、千草川に召うて難を船越山と瑠璃寺に避けた。その地において成長して眞實法印と称し、瑠璃寺の住転となられたのはこの幼君である。尚瑠璃寺は、元兵衛三河村船越にあつたが、今では町村合併により佐用郡南光町船越と変り、眞言宗高野派に属している県下でも有名な寺院として知られている。

平瀬六郎右エ門耐清正は、五十三才の時長水城の幼君を追襲したが、乳母のために臂より斬落されたので、後年不自由な余生を送り、慶長六年五月（西一六〇一）六月二日に、七十四才を一期として死去したが、その時引導は西蓮寺の尊誉上人が渡されたとしるされてい



る。

清正が一臂を失い苦勞した為にか、現在手痛の傷や病にくるしむ者は、千種村にある平頼清正の墓前に詣でて果命に手痛の全治するように祈れば快方に向い、痛みは去り遂には治癒するといわれ、昔から昭和の現今に至るまで、手痛の傷病になやむ患者の参詣する姿も見受けられるという。

(34.5.31稿)

# お地蔵さま縁起

下 村 慶 之 助

(一)

安富町狹戸部菴の山麓、といつても余程南の方です。安原新治宅の西、安原三郎氏宅の南に接した所に小さな祠があります。村の人々は「お地蔵様」と呼んでいゝる。病气の人、家庭に悩みを持つ人、不幸の続く人などが相当遠い所からでも参られる。

昨年、神戸市から狹戸出身の某氏が参拜のため久しぶりに帰られて、高野山の名僧も同伴されているので、何だか物々しい感じを受けた。そのわけを尋ねると、私は戦災に遭い、体の工合も悪く家族等を考へても不遇である。ふとした事から法華經の信者になった。信迎が深まるにつれ、因果応報を堅く信じるようにな

った。自分たちの祖先が有重氏の友情を裏切つて殺したその根みが尔来子孫に報い、到る処で不幸不遇を見せられている。然るに我々子孫は、そのお詫びも祭祀も怠つていたので誠に申訳なく、今後は時々帰郷参拜して丁重な読経を捧げお祀りしたいとどのことであつた。「お地蔵様」の言い伝えはこんなことで村人の間に更に新しく甦つた。伝説は口から口へと伝わる間に大きく変わつてくるので、ここでは聞き伝えと古文書によつたものを対照して書くことにした。

(二)

羽柴秀吉の中国平定の際、高沢の長水城も攻奪され、秀吉は自ら手兵三千五百騎を従へ、姫路―林田―松山―狹戸―宇原―川戸―山崎へと進路をとつた。長水軍も狹戸に主力を注ぎ之を迎え撃つ作戦に出たが、松山―狹戸の西側山麓では相当猛烈な戦いが展開され、両軍の間に多くの死傷者を出した。村人は勿論年未恩顧

## 保健調剤は

# あがた薬局

薬剤師 梶 俊昌

TEL. 15

の長水軍に陰に陽に心を寄せて働いた。食糧を送った為、負傷した武士を匿った為、或は諜報を伝えた為、秀吉軍に斬られたものも数多あった。

長水軍の敗戦による犠牲者の慰霊祭が、庄屋有重吉吉之助によつて厳修されたのは、ずっと後のことである。墓標が立ち三輪五輪の塔が次々と刻まれて行く。然もその石塔には常に花が手向けられ、清掃も行届いて香の煙もゆらいで厚い祭祀のほども想像された。純真な農民が心からなるお祀りを怠らぬようになつて村には平和がもたらされ、幸福な山村に甦つてきた。その原動力になつたのは長水戦に共に負傷した落人、有重吉之助と安原菊右エ門の兩人であつた。

(三)

吉之助は剣道に優れ、長水城主宇野政頼の配下となつて戦い、左眼を射られて失明、大庄屋有重の倉に匿まれて手当をうけたのが始まりで、八年後に有重の娘ちせが十六才の時、婿養子となつた。

菊右エ門は槍の達人、吉之助と共に長水戦に従軍、狭戸奥山山麓で大いに戦つたが足場を失つて倒れた刹那、股に一太刀浴せられて重傷を負い林の中へ遁れて百姓卯助に救われた。卯助には気立のやさしい娘おしげがあつた。痒い所に手の届くような温い親切なおしげの介抱が遂に熱い恋と變つて、とうとう婿になつた。

吉之助は葛の上町に、菊右エ門は中町にそれぞれ武家屋敷の実家があつたが、敗戦後取られる悲運に遭つた。帰るに家にのまない兩人は世の若ると共に、武士として起つ望みを捨てて帰農し、各々その家の娘と結婚していついたのである。菊右エ門は吉之助より四つ年上の三十才で、大きな体格の豪放な風であつたが、



★ふとん わたや 羊に打直し

高野 本店 TEL.244

ふとん店

吉之助のような財力には恵まれていなかった。

この頃は戦国騒乱時代なので、主家を失つた野武士が天下にうようよしていた。山田長政のような成功者は室くじの一等に当つたのと同じで、何万中の屈指の者であつた。大抵は山々の群に入つたり、強盗を働いたり、海賊になつたり、それは悲惨なものであつた。百姓になつて、どうにか安泰に暮せる者は上の部である。然し農家の暮しは低級で、これまでドン百姓と呼びすてにしていた者から、慣れぬ仕事を教えて貰わればならぬ辛さ馬鹿らしさがある。納税は苛酷で、それ

に養子という立場は家族から牛扱いにされるようにも思えた。かつての友人が時々訪ねて来て、立身出世の話、苦しい話など種々聞かしてくる。両人の家は畑を一つ隔てた前と後の隣同志で仲のいい同柄であった。吉之助は葛の上町に、菊右エ門は中町に屋敷を持つ青年武士であったが、菊右エ門の方が身分はずっと高い家柄だった。しかるに戦に傷いて救われた家が、吉之助は大庄屋で、片方は貧農というそれだけで二人の運命は逆転してしまった。二人を来訪する友人もすぐ有重へ行つてちやほやするので菊右エ門は一入寂しいものであつたであろう。何とか現状打破を試みて一旗を挙げたいという野心を燃やして、時には宇原坂を越えて同志を訪ねたりしたが、いつもやさしいおしげのことを思つて帰つてくるのであつた。

(四)

其の後幾年か後、百姓仕事も一応は身につけて来て平和な月日を送つていた旧暦の三月三日、節句の日である。瓢を携えて一笠を交そうと塩野の鉦掛松に二人連立つて登った。ここは川戸、宇原、塩野の三方から登りつめた頂上で、今は小島以外訪れるものもない雨かで寂しい仙境である。二人は羽織も脱いで鉦掛松に引っかけ、両刀もはぶしてうらくつろいで大きな瓢を中にして、しきりに盃を重ねた。話はずんで長水敗

戦から秀吉軍などの非難になり、遂に意見の相違になり、日ごろのふんまんの多い菊右エ門がまず刀を取つて勝負をいどんだので、吉之助はすべてを羽織に包んで山を走り下つた。菊右エ門は直ちに後を追つたが追いつけなかつた。吉之助は路を変えて林の中へまぎれこんだが、遂に踏み迷うて相当あちこちした揚句、またもとまた道に舞い戻つて家路についた。山麓の小路を曲つた途端、何者かが老樹を背に凭れかかつて居眠りしている。菊右エ門だ。引返そうと思つたが眠つているから足音を忍ばせて前を通り抜けようとした。その時ふと足音に眼を覚ました菊右エ門は、むつくり起き上ると同時にエーツと裂帛の掛声と共に吉之助を突いた。槍は咽喉を貫いて朱に染つたまま、墜と倒れ、そのまま呼吸を引取つた。菊右エ門は先に逃げ帰つた吉之助が引返して民眠りを幸に襲いかかつたものと錯覚して突差に衝いたのであつた。この結果を見た菊右エ

樽岡写真館

出水町  
TEL. 515

名産

揖保の若鮎

篠の丸

最上最中

# 荒木菓舗

山田町

電話一七〇番

門は夢からさめて茫然とし、酔も一変して青くなつた。

(五)

何でもないことが大きな結果を産んだので、菊右エ門はそれ以来酒を絶ち、朝夕吉之助の祭祀を怠らず続けた。或日のこと、田を犁いていると畦に一匹の蛇がいた。それを見た豪の者の菊右エ門も凜然として直青になつた。上半身は羽二重色、下半身が茶色で、ぐつと鎌首を立てて睨む眼を見ると片目がつぶれていた。あの節句の日、片方失明した吉之助が、米沢お召の羽織に仙台平の茶袴をはいていた姿そっくりなので肝をつぶしたのも無理はない。

その後、度々この蛇を見かけるので、執念深く自分に付きまといつてゐるものと思ふようになつた。悔悟とざんげで毎日を苦しんだ揚句、一字の堂を建立して地藏大菩薩と崇め奉つた。

時は永禄五年のことである。堂内に二体の坐像が安

置され、これが本尊となつてゐる。高さ五寸位の大き

さで、林田村橋瓦大工作兵衛が造つたものである。

へ当時取人にはその技術によつて、大工、中工、小工

の三階級があつた。瓦師にも左官にも建築する大工に

も表具師にも、すべてこの三段に分れていて賃金もち

がつていたものらしい。

(六)

以上は私が幼い時から、周囲の人々に幾度となく聞かされた話であつて、その後古文書を見たりして頗る疑しいことだと思ひ出した。

1「国主平十郎（永生元年生）は天文元年二月瀬泊の

身となり、同十九年兵衛邸安師在せはとに住む庄屋

有重某の後見となり、天文廿三年十一月卒五十一才

この人のことかと思つたが年代がちがう。

2「吉之助は亨禄元年生、村長役を勤め、永禄十二年

六月卒す。四十二才」となつてゐるから長水戦より

十一年も前に死んでゐる。死後七年即ち永禄五年に

坐像を造つて祭り、更に三十七年後の子孫が只今の

堂宇を建立したものであろう。

3 今から四十数年前この槍の穂先は、伏戸大才神社

境内の観音堂に納めてゐる。しかしいかにかに武士でも

節句の花見に槍まで持つていつたかどうか疑問であ

4. 地藏縁起の古文書を紹介すると

一、 狹戸有重卒去の後、跡目相続の儀相致き候に哉  
毎度小蛇と化し屋敷の内を徘徊致す、村中童女驚  
恐すること甚し、依つて我等親類の情をもつて慶  
長三年壬午年八月有重屋敷の内八面四方の地面を  
定め地藏菩薩を勧請致す者也

安田五郎兵衛宗近（花押）

右のように非常な違筆で書かれてある。之にも安  
原が有重を殺したとは記録されていない。吉之助は  
おそらく四十二才の男盛りに病歿したのだろう。豊  
かな財産と美しい女房を残して世を去つた吉之助や  
家族の心情と蛇とを結びつけて迷魂だと考え地藏堂  
の建立となつたものと思われる。

5. 伝説によると、有重は刀の名人、安原は槍の使い  
手と大げさに言うが、之も亦次々と尾ひれをつけ足  
したものだろう。有重には刀も多く、二字帯刀も許  
されていた。戦国交遷を機に浪人から財力にまかせ  
て買い集めたものらしく武芸の心得があつたとは思  
われない。

# 天明年間の山崎要覧

安井俊二

旧藩時代には、御巡見様といつて、約三十年目に幕  
府の役人が三名宛各藩地を視察して歩いた。この巡見  
様が天明八年（一七八八年）に山崎藩を通過した時に作  
つたらしい藩地の現況と郡内状況を書いた手鑑という  
ものを見る機会をえたので、その一部を紹介して御参  
考にしたいと思う。当時の藩主は、明君といわれた本  
多忠可侯であつた。

以下は旧山崎町内の部で

- 一、 町数十一町、東西十丁余、南北二丁半
- 一、 地子 米 百三石七 一升九合一勺
- 一、 家数 三百九十九軒
- 一、 釜 床 五百三十軒
- 一、 人 数 千七百九十八人
  - 内 男 九百七人 女 九百四十八人
  - 僧 二十九人、社人 二人、山伏 三人
- 一、 酒 屋 六軒、一、 油 屋 四軒

# 朝日堂菓子舗

山田町 電五一

一、鍛冶屋	八軒	一、八百屋	一軒
一、紺屋	八軒	一、質屋	九軒
一、大工	十人	一、築屋	二軒
一、米屋	三十七軒	一、小向物屋	七軒
一、臭屋	一軒	一、桶屋	十二軒
一、牛	十七疋	一、馬	一疋
一、寺	十五ヶ寺		
淨宗	二ヶ寺、	淨土	二ヶ寺、
法華	三ヶ寺、	一向	五ヶ寺
一宮	二社	八幡宮	惣道神
八幡宮社料	下田三反、	下島三反	
外二反三畝十一歩	神主神子屋敷作分		
四斗五升俵	拾二俵	鐘構料	
除高	拾石		

以下は本多領で、町以外の在所分

一、道場	二ヶ所	一向宗
一、宮	十六社	
一、家数	千九百二十九軒	
一、人数	七千六百三十九人	
男	四千四十一人	女三千五百八十三人
僧	十人	山伏四人、尼一人
一、牛数	六百五十三疋	
一、馬数	十八疋	

以下は郡内状況

尖栗郡鉄山

御料 須賀村 鳩屋孫右エ門

引原村の内

一、音水山 鉄山一ヶ所

道法 山崎町迄八里

東河内村の内

一、高羅山 鉄山一ヶ所

道法 山崎町迄七里半

メ 二ヶ所

尖栗郡八郷

柏野郷 二十一ヶ村

御名より中広瀬迄、門前、奥小屋塩田迄、金屋よ

り城下

比地ノ郷 五ヶ村

上比地より宇原迄

高家郷 十六ヶ村

今宿より小茅野迄

石作郷 十二ヶ村

三津より田井迄、野々上より嬬ヶ沢まで

安志郷 十二ヶ村

伊和郷 三十一ヶ村

杉ヶ瀬より道谷迄、森河内迄

御方郷 十九ヶ村

生栖より公文迄

土万郷 二十三ヶ村

土万葛根より河内迄 漆野より船越迄

メ 百三十九ヶ村

一、高三萬八千二百石余

内 一万九百石余 山崎領三十九ヶ村

三千九百石余 乃井野領十八ヶ村

五千百石余 安志領 十八ヶ村

八千四十石余 尼崎領三十一ヶ村

一万百石余 御公料三十三ヶ村

百五十石 寺領

# あとがき

●鳥田禎先生は、のじぎく文庫から「ふるさとの遺香」を発売されましたが、この為多忙であつたので、前号の続稿を頂くことが出来ませんでしたのでお断り申します。

●郷土誌「播磨」を多年発行していられます播磨史談会の小林楓村氏より安志領の異色ある原稿を頂き掲載しました。

●前号に書き現しましたが、池田平市氏(上寺)は今春の姫路美術展(やまとやしき展覧)にみるく、菩薩の陶像を出品入送されています。ご覧の方も多いと思ひますが、半脚思惟像で優美な作品です。

●別掲のとおり祭典と講演会を前催しますから多数御出席下さい。檀上氏は県下をあまねく足をもつて踏査され、本郡にも数度調査に見えていきますから御期待に添うことと存じます。

●本会からのお願ひですが、本会に入会して頂かればならぬ人で未入会の方も相当ありますので、此際是非御入会下さい。尚会費未納の方は、当会集金が手廻り兼ねますので、慶次への横井怒一氏(又は最寄りの役員)までお支払い願ひます。(一ヶ年百円)

●次号原稿は、十二月中に御出稿願ひたく、各方面より種々の原稿を頂きたく、御協力をお願い致します。四百字詰原稿紙を三四枚程度にお願ひ致したく、長いのは分載して下さい。

## 会員名簿 (五)

- (東鹿天) 志水新次郎氏 (寺町) 玄瀬 伊藤
- (出水町) 岸本 徳一氏 (山田町) 梶 俊昌
- (赤穂郡) 小林 楓村氏

# 山崎閨斎神社 祭典案内 蒼魂稻荷神社

閨斎神社境内に鎮座の蒼魂稻荷神社は、元山崎小学校庭にあつたのを、昭和二十一年に境内に移転鎮座せられましたので、本年は特に両神社の祭典を併せて盛大に厳肅に執行いたしたいと思ひますので、會員御一同も繰合せの上御参列を希望します。

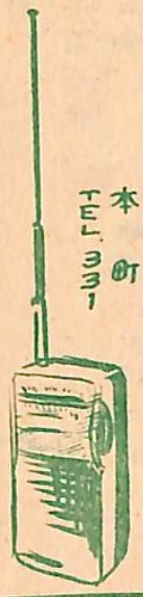
一、日時 十月二十四日(土曜日)午前十時  
一、挙式後、芸能余興も考えております。

## 講演会

一、同日午後一時より山崎町役場会議室に於て  
神戸新聞社員 檀上重光先生  
の記念講演を開会いたします。同先生は神戸新聞紙上に「祖先の足あと」を御執筆になつて居ります方

テレビ  
ラジオ  
家庭電器

ラジオ



本町  
TEL. 331

で御座います。誰方も隨時御来聴下さい。

主催 兵庫郷土研究会  
後援 山崎小学校教育友会  
附記  
一、會員には別に案内状を差上げませんので此の記  
一、幸を以て御承認下さい

# 郡北見学探勝案内

関西一の折紙付きの紅葉の名所が郡内にありますので郷土会の皆さんと行を共にして見学、左記の予定により一日の清遊を試みたく、御賛同の上お早くお申込を待ちます。

一、日時 十一月一日(日曜)  
午前七時神姫停留所出発  
午後五時帰崎の予定

。伊和神社参拜(宝物拜観) 大成庵見学(宝物拜観)  
。赤西音水(菖山の紅葉と溪谷の美を心ゆくまで観賞)  
。引原ダム(秋景の眺望見学)  
御賛同のお方は会費二百円を添え左記へお申込下さい。  
満員の上は締切ります。

(各自手弁当は御持参の事)

教育委員会内 福井

申込先 本町 成文堂

郡是西 八百福商店